In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	中国における文化開発とテーマパーク事業 ： 呉橋雑技大世界を事例として
Author	橋爪, 紳也
Citation	人文研究. 51 巻 12 号, p.77-100.
Issue Date	1999-12
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学文学部紀要
第51巻　第9分冊　1999年77頁～100頁

中国における文化観光開発とテーマパーク事業

——呉橋雑技大世界を事例として——

橋　爪　紳　也

1　はじめに　「文化観光」とテーマパーク

世界観光機関（ＷＴＯ）は1997年度の「国際観光概観」のなかで，各国および諸地域が，「雇用の創出と収入をもたらす産業として，あるいは既存の産業に代わりうる産業」として観光業を認識しはじめたことを強調，さらに「観光宣伝は競争が激化した」と記述している。そのうえで「最近の動き」を以下の三項目に整理している。(『1997年国際観光概観　世界観光機関による特別報告』(財）アジア太平洋観光交流センター，1998)

第一には環境保護への消費者の関心のたかまりがある。環境保護に寄与する観光に注目するいっぽうで，環境破壊につながる恐れのある観光開発に対して厳しい態度をとる旅行者が増えてきているという認識を示す。

第二には観光と娯楽，観光とギャンブルを結びつけた「人工の観光魅力」すなわちテーマパークやメガ・リゾート開発の動きが顕著になっている点を挙げている。

そして第三は，主要な旅行者送り出し国にあって，戦後のベビーブーマー世代の多い諸国を中心に，人口の高齢化がすすんでいるという指摘である。

以上の傾向に加えて，同報告書では「文化的な旅行商品への関心」が高まっていることを特に記している。人口の高齢化は，おのずと旅行者の高齢化をもたらす。高齢者層の文化への関心が，結果的に「文化観光」の興隆を産み出しているという理解が可能であろう。

以上の文脈から考えるならば，今後の国際観光に関わる研究では，地域に新しい雇用を産みだす産業振興であるという認識に加えて，それが広く「文化」への関心を掘り起こす契機となっているという理解が不可欠である。そこあって筆者は，文化研究の視点から，先の報告書の用法に従えば「人工の

観光魅力」に着目する。とりわけアメリカで創案された「物語性」を重視する遊園地の「型」，いわゆるテーマパークという集客装置のありようが，世界にいかに伝播し，模倣され，受容されているのかについて関心を持ち，各地でのフィールドワークを重ねてきた。

関心を整理するならば，おおよそ次ぎの三項目に集約される。

第一には遊園地内における「公共性」に関わる課題である。「物語性」を重視するというテーマパークで培われた文化的な技術が，遊園地内にあって，地域に蓄積されていた伝統文化を再現し，さらには失われた伝統文化を再生させている例がある。遊園地という都市施設は，単なる集客施設ではなく，文化施設という一面をあわせもつ。公共セクターの社会教育施設に準じる「公共性」をも持ち合わせているのではないかという仮説をたてている。

第二には「文化受容」に関する課題である。時に「文化帝国主義」とも揶揄されるアメリカ流の「エンターテインメント・ビジネス」の総体，とりわけアメリカ流の遊園地設計に関わる技術，およびマーケティングを含めた遊園地運営の方法論が各地で導入されている。その途上にあって，「アメリカ文化」の何が受容され，あるいは何の要素が拒否されているのかを検討したい。

アジア諸国にあっても例外ではない。20世紀に創案されたアメリカ流の「エンターテインメント・ビジネス」は，日本や韓国など経済成長をとげた諸国でまず模倣され，近年では「観光立国」を目指すアジア各地にも建設されるに至った。たとえばシンガポールでは，本格的な都市型リゾートを目指すセントーサ島に複数のテーマパーク群が集積している。あるいはタイのビーチリゾートにも，彼の国の歴史と文化を主題とする遊園地が計画されている。おのおのの「受容」の過程に見い出される固有性に着目したい。

第三は「文化生産」に関する比較研究である。演出のノウハウはアメリカの先例に範をとっていても，ただその物語・主題の選択において，またマネージメントや経営の面でも，土地ごとの事情が差異を生みだす。各地のテーマパークで，それぞれに等しくアメリカ文化を受容しつつも異なる「文化生産」の仕組みが生まれている。内容を異にする海外の例と比較することから，日本におけるテーマパークのありようを照射する視点も得られると思われる。

また遊園地を文化の受容のコアとして，周囲に及ぼしているであろう影響も重要な分析対象である。遊園地という限られた領域にあって再編成された地域文化が，その地の大衆文化の「生産システム」にどのように関与してい

るのかを比較検討したい。

本稿は以上の関心に立ち，中国におけるテーマパークの事例報告をなすものである。筆者は1995年から数度にわたり，主に河北省・山東省・四川省・広東省および台湾におけるテーマパーク，および既存の遊園地内における「物語性」を重視した娯楽施設類について現地調査を重ねてきた。対象とした施設は，おおよそ二十ヶ所である。調査手法は経営者へのヒアリングを主とし，開設に至る経緯と開園後の経営手法，経営状況などを把握している。

各事例の詳細と比較検討の結果は別報告にまとめる予定であるが，調査からあきらかになったのは，娯楽に関わる産業分野における中国と日本との関係である。中国におけるテーマパークのなかには，日本の遊戯機械メーカーがコンサルティング業務を引き受けて関与している例が少なくない。またわが国で使用され，中古品となった遊戯機械の二次的な市場ともなっている。いっぽうで香港企業との関係が強い事業も多い。アメリカ流の「文化産業」であるエンターテインメント・ビジネスが日本や香港に伝播，それぞれに固有の受容がなされ，加工がなされた。それが再度，中国に文化的な技術として移転している点が注目される。

以下では中国におけるテーマパークの動向を概観したのち，河北省呉橋における「雑技大世界」の事例を紹介，「文化観光」と地域開発，さらには地域文化の変容について検討を加えるものである。

付記するならば，呉橋の事例は日本との関係性よりも，むしろ香港との交流が顕著な事業である。

2　中国における「文化観光」とテーマパーク・ブーム

中国各地で外客誘致を射程に入れた地域開発がすすめられたのは，90年代になってからのことと考えられる。1978年，改革開放政策が採択され，いわゆる「観光産業」が注目されはじめた。また85年から始まった第七次五カ年計画において，観光地に至る交通網など基盤整備がすすめられた。

90年代になると，92年の「中国友好観光年」制定を端緒に，国家旅游局と中国民航局が外客誘致を強化しはじめる。93年「中国山水風光游」，94年「中国文物古跡游」，95年「中国民族風情游」，96年「中国渡假閑遊」，97年「中国旅游年」というように，年度ごとの主題を定める観光キャンペーンを継続して実施している。また国家旅游局は，全国249ヶ所の国定観光地，および14のテーマツアーを設定する。なかには都市部だけではなく，少数民

族の住まう地域なども含まれている。都市型の観光だけではなく，いわゆるエスニック・ツーリズムの振興も国策として示されたことになる。

エージェントも多様な観光を提供しはじめた。1984年までは中国国内における国際観光は「中国国際旅行会社総社」が一社で独占していたが，その後，国際観光業務連絡権限が地方の旅行社にも認められるようになった。同時に従来は外国人の立ち入りを禁じていた都市・地域も順次開放され，1996年7月の時点で1260ヶ所を数えるにいたる。

このような社会条件の変容を前提として国際観光客数が急増する。とりわけ日本・韓国・台湾・東南アジア諸国など，アジアからの来訪者の増加がその成長を支えた。世界観光機関の統計に拠れば，1997年度における国際観光到着数は2377万人を数え，90年の1048万人余と比べると倍増している。国別のランキングでも12位から6位に上昇している。90年代を通じて，中国は世界有数の観光大国に成長したといってもよい。国際観光収入も97年度には120億7400万米ドルと世界第8位に位置づけている。

また沿岸部を中心とする経済成長が庶民のレジャー行動を活発にし，純粋に「遊び」を目的とする国内旅行客も増えている。このような状況を背景に各地域で，観光開発の競合状態が顕著となり，同じような趣向の集客施設が，あいついで建設されるようになった。なかで目につくのが，地域の「文化」を主題とした遊園地，いわゆるテーマパークを建設する例である。

成功した事例のひとつが，1989年9月21日，経済特区である深圳に開業した「錦繡中華」である。華僑資本によって開発されたこの遊園地は，中国の国土をかたどったデザインがなされた園内に，各都市，各民族の代表的な建築物や名所景観を，大型で精巧な多数のミニチュア模型で再現している。遊園地全体のランドスケープに，「多民族国家」という，ある種の「国家の理想」が託されている。民間資本によるアミューズメント施設であっても，そこに政治的なメッセージ性を読みとることができる。

この「錦繡中華」の開園以後，中国各地で同種の遊園地が急増したという指摘がある。（Oakes，1998，p50）確かに同趣向の遊園地，いわゆる「小人村」の例は多い。筆者も北京郊外，広州や無錫などで，同じようなミニチュアランドを視察した経験がある。

また深圳のテーマパーク「東方神曲」で実施したヒアリングでは，「錦繡中華」とほぼ同時期に北京団結湖畔に建設された「西遊記」を主題とする遊園地が，ブームの端緒であったという見解であった。確かに多くの観光客を

集めた北京の事例が手本となって，92年に開業した「東方神曲」をはじめ，各地に孫悟空の物語を主題とするテーマパーク，ないしは「西遊記」のアトラクションが建設されている。

契機については，このように諸説があるが，1989年以降，わずか三年間のあいだに，少なくとも16ヶ所の大規模なテーマパークが，また数多くの小規模な遊園が新規に開園した。しかもその大部分は，シンガポールの「ハウ・パー・ビラ」と同様，中国の歴史と神話世界を題材にするものであった。その後，93年には，中国の伝承や民話に題材を求めたテーマパークが少なくとも40ヶ所開業しており，そのうち「西遊記」に題材を求める例が23ヶ所であった。そのほか民族文化を主題とする遊園地が34ヶ所，歴史に基盤をおくものが８ヶ所であったという。（Oakes，1998，p50）

なかにはいかにも中国らしい主題の遊園地もある。筆者が実見した事例を列記するならば，中国全土の有名な石窟を模造する洞窟型遊園地「萬仏洞」（山東省済南），アジアの巨大仏像のレプリカを集める「仏像大世界」（四川省成都），道教の「あの世」を再現する屋内遊園「鬼国神宮」（四川省豊都）等である。

新しい傾向としては，広州の「Oriental Studio 2000」のように，香港映画の名場面を再現するアトラクションを導入，既存の遊園地を改造して，テーマパークへの脱皮をはかっている例がある。また，すでに複数のパークが集積，都市型観光の拠点となっているところもある。たとえば深圳には先述の「錦繡中華」のほか，少数民族の生活文化を主題とする「中国民俗文化村」，世界中の有名建築のミニチュアを集めた「世界之窓」が，同じ華僑資本によって建設されている。

しかし結果的に各施設間，地域間の競争が著しくなり，深圳の「東方神曲」のように，開業後わずか数年で転売を余儀なくされている例も目につく。また先に例示した北京団結湖畔の西遊記の遊園の例のように，すで閉園しているところもある。このような状況を総覧する時，90年代の中国にあって，あきらかに「テーマパーク」の流行があり，すでに競合の段階にあると断じてよいだろう。

3　呉橋における文化観光開発と「雑技大世界」

ここでは中国における文化観光とテーマパーク事業として，河北省呉橋（Wu Qiao）においてすすめられている事例を紹介したい。以下は筆者が

中心となる研究グループが，97年８月に実施した予備調査，および98年８月９日から11日に呉橋県政府，呉橋雑技大世界，呉橋県立雑技学校等の関係者を対象に実施したヒアリング調査，文献調査の成果の一部である。

３－１　呉橋と「雑技文化」

まず呉橋の城市の特徴と「雑技文化」について，その変遷を簡潔に述べておきたい。呉橋は，陸路・水路ともに交通の要所にあって，古来，人や物資の行ききが盛んな場所であった。漢の時代には修県に属し，また春秋戦国時代には，孫月賓という名将の墓所「安陵」をこの地に造ったことから「陵県」と呼ばれた。のちに漢の景帝の治世下に「安県」となり，北魏に「安陵県」となった。

呉橋は，金から清，そして中華民国，日本軍占領下，そして新中国に至るまで，歴代の県政府が所在した場所である。まず明に時代に土塁の城が，ついで17世紀に煉瓦造の城壁が築かれている。乾隆33年（1768），当時の知事沈士絅は巨費を投じて，黒い石灰煉瓦を用い，方形平面の新しい城を造った。城内には十字型に通りを設け，街区を区画した。知事が「この城壁は銅や鉄のように強い」などと演説したことから，「鉄城」の通り名が送られた。

また呉橋は長い歴史のなかで，多くの優れた旅芸人を輩出したことで知られている。20世紀になって近傍で発掘された1400年前の壁画にも，さまざまな曲芸が上演されている場面が描かれていた。

「鉄城」のなかに有名な「文廟（孔子廟）」があった。この廟の存在が，この地における芸の振興に影響を及ぼした。毎年旧暦８月７日，孔子の生誕日には，県下の有力者がここに集まり盛大な式典を催した。伝承に拠ると，この祭に際して，県知事は村に暮らす曲芸師，手品師，動物を使う芸人たちを招き入れ，みずからが儒教奨励の演説を終えたのち，おのおのの持ち芸を披露させた。県の役人は商店や有力者に「評票」と称する紙片を配布，みなが各自の評価に応じた枚数を芸人に渡した。芸人たちは，のちに県役場で，得た票を現金と交換した。なかでも優秀な者は，知事から直接，表彰されることもあった。また県政府は，儒教の奨励や学校建設の寄付を募る際にも芸人たちを動員したという。

中華民国が成立してからも，呉橋の芸人たちの活躍は続く。北京や上海など大都市での興行のほか，欧州や日本，東南アジアなどに旅巡業に出る一座があいついだ。なかには田仕合など，日本人とともに曲芸団を組織，海外で

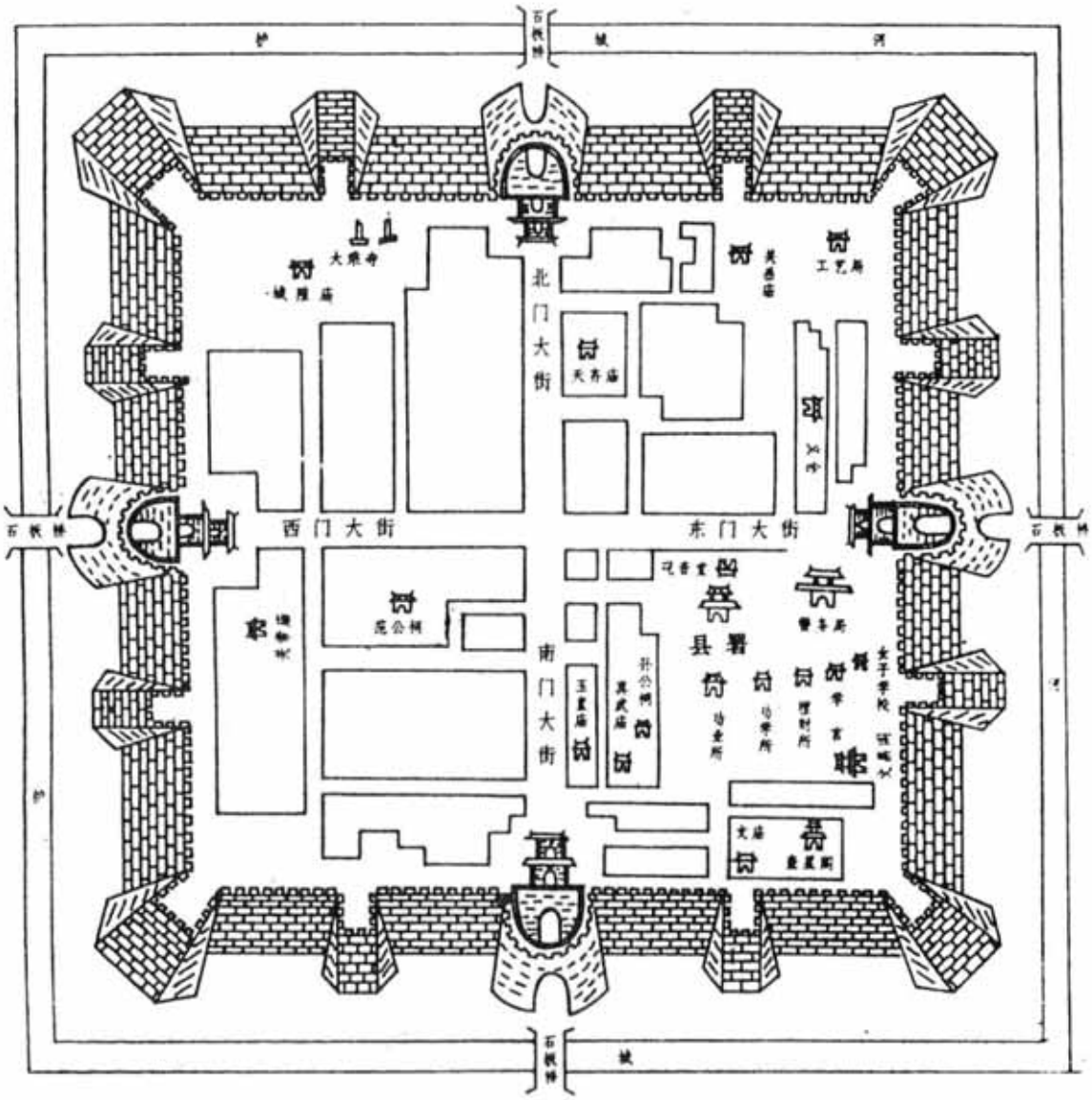

北門大街
西門大街
東門大街
南門大街
大乗寺
工艺厂
天齊廟
花公祠
县署
警察局
理財所
馬学所
馬金所
玉皇廟
真武廟
文廟
東嶽廟
城隍廟
石板桥

図１　呉橋、旧「鉄城」平面図

客死した人物もあった。各地の民族芸能を総称して「雑技」という概念が定義されて以降，このような実績を背景に，呉橋は「雑技発祥の地」という評価を得るに至る。のちに周恩来は「雑技の郷」と呼び，近年においても，地域のセルフイメージを説明する際には「99歳の老人から歩きはじめたばかりの子供まで雑技をすることができる」といった類の慣用的な言いまわしが必ず用いられている。

解放後，人民政府は「雑技文化」の伝統を回復しようと，「雑技芸術」の振興に力を入れはじめた。蔑視の対象となりがちであった芸人の身分を保障するため，1951年，政府は登録制度を採用する。呉橋では，旧「鉄城」内の広場で，10日間以上にわたって芸人の資格を認可する審査会が実施された。この時，千人を超える芸人が参集し，それぞれが芸を披露したと伝える。翌年，芸人たちは「呉橋県群衆芸術連合会」および「雑技協会」を設立した。この時は3650人の芸人が参画，31の「雑技団」，30の「馬戯団」（曲馬など動物を用いる曲芸を含む雑技団），242の小グループが組織された。

ここに至って芸人の身分は保障されたが，文化大革命によって廟における祭礼や大道での芸能が禁止され，呉橋を本拠地とする芸人たちが活躍する場は減少した。呉橋で継承されていた「雑技文化」ではなく，むしろ北京や上海に拠点をもつ大規模な雑技団によって，西洋のサーカスの影響が強い，近代的な「雑技芸術」が振興の対象となった。

伝統的な芸能を含む呉橋の雑技が再評価されるのは，開放政策がすすめられてからのちのことである。現在では，主要な団体だけでも30を超える雑技団があり，またこの地域で暮らす27万人ほどの住民のうち，2300人が雑技関係者であると推定されている。旧観ほどではないが，郷土が誇る文化であるという認識に加えて，芸能も地域の基幹となる産業のひとつであるとする認識がある。またいっぽうで，次章で紹介する県立の専門学校などでは，従来，中国雑技にはなかった演目の創案も行われており，新たな「雑技文化」の創出にも力を入れているとみて良い。

呉橋では，元宵節に三日間にわたって雑技や民間芸能を披露する大会，また春と秋に雑技興行を含む縁日などの催しがある。また河北省随一の大都市である石家荘では，呉橋の地名を冠した雑技コンクール「中国呉橋国際芸術節」が，これまでに数度，実施されおり，フランスや日本，東南アジア諸国など世界中のサーカス関係者が集い，優秀な成績を治めた芸人との契約を果たしている。92年には県が運営する「雑技団」を臨時に結成，アメリカや日

本での公演を成功させている。

3－2　呉橋における文化観光開発

県関係者および観光事業に関わる地元有力者へのヒアリング結果を総合すると，呉橋において観光開発が検討されはじめたのは80年代後半という。地元の有力者が地域の「雑技文化」を活かし，新しい事業を興そうと企てた。当初は北京に通じる幹線道路に面して，雑技を主題とするドライブインを建設しようとする計画であった。

ところが各地での遊園地事業の成功を見聞した県関係者が，県政府も事業に参画しつつ，外資等との合弁事業として規模を拡大するように指導する。事業が本格化するのは90年代に入ってからである。県は国道に面した二ヶ所の工場と耕地，空き地を購入，用地をとりまとめて観光開発のための「旅游区」とした。

ついで県政府は，複数の建築事務所に施設の設計・計画を依頼する。なかでもっとも雄壮な構想を示した北京の中国建築公司の案を採択，92年4月に一期工事に着手する。総投資額は5400万元，動物雑技の上演場に関しては「馬戯団」を経営する個人が請け負っているが，そのほかは県政府と香港の華僑資本が共同出資して事業をなしている。

翌93年11月26日に竣工した施設は「呉橋雑技大世界」（以下，「雑技大世界」と略）と命名され，同月28日から仮営業を実施している。地域の文化を活かしつつ，観光・芸術・文化面での交流，雑技芸人の育成，経済効果などを考慮し，「新しい雑技文化のセンター」となることが想定されていた。

この事業に際しては税制をはじめ，さまざまな優遇制度が採用された。すべての投資者は，開業ののち10年間は土地の使用料金と関連する税を免除された。5～10年間は営業税を，さらに「旅游区」内の外資企業は工商統一税も免れることができた。従業員に賦課される調節税も5年間におよぶ免税の措置がとられた。所得税は13％の割合で賦課されたが，外資企業が自国へ利益金を送る際には，送金額分の所得税を減免することができた。

資金面でも優遇制度があった。「雑技大世界」に関与した企業に対しては，優先して融資がなされた。また工事にも優先権があり，資材調達に際しても便宜がはかられた。また建設協力者を紹介し，かつそれによって経済波及効果をもたらした功績者には，1000元の報奨金と一年以内に発生した利益の1％が与えられた。

4　「雑技大世界」の概要

ここでは「雑技大世界」について，全体の構成と第一期工事分の諸施設の配置，中核施設である「江湖文化城」「魔術迷幻宮」「雑技奇観宮」，および関連する施設の概要を述べて来たい。

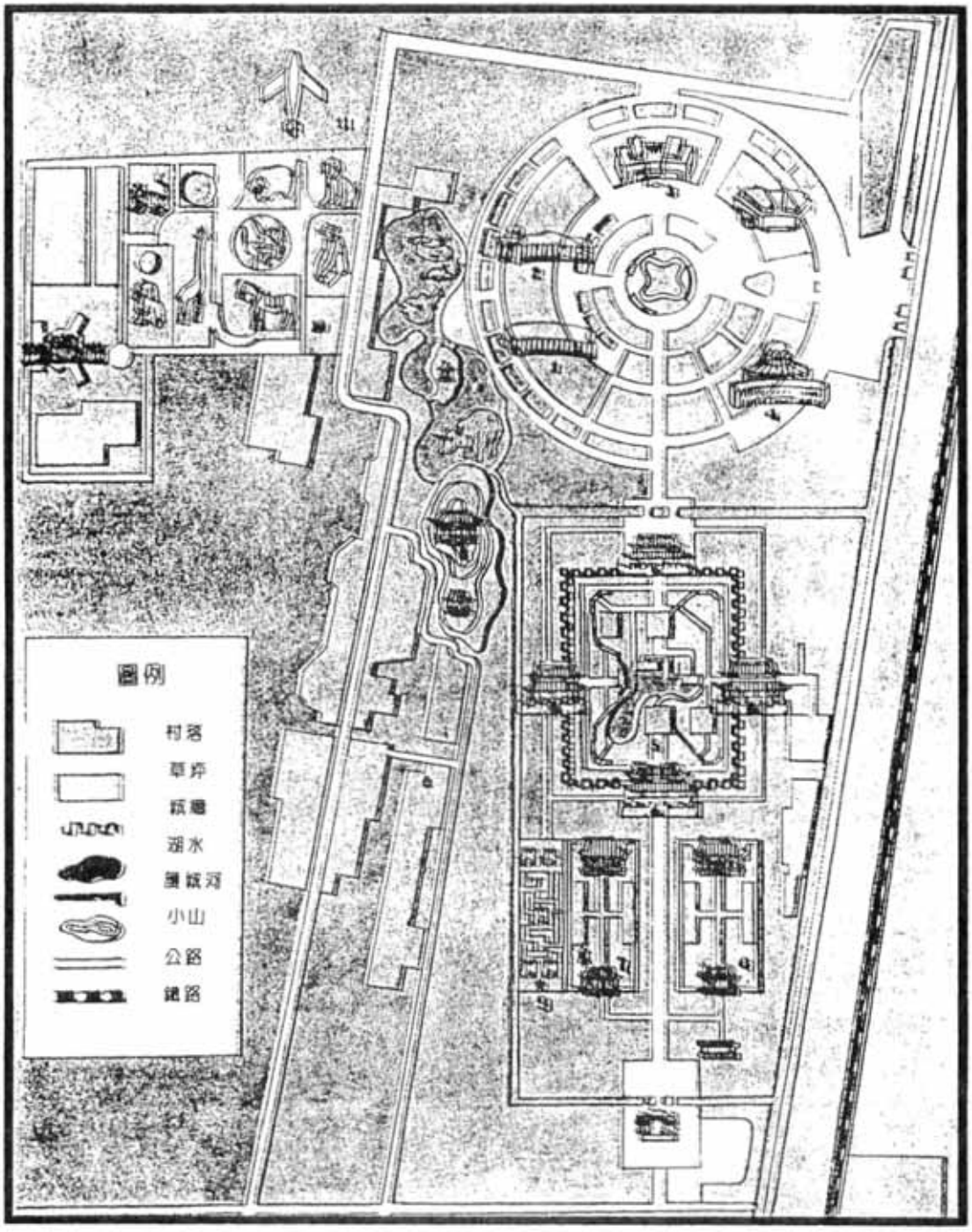
4－1　全体の構成と施設配置

「雑技大世界」のメインゲートは呉橋市街地の中心に近く，敷地全体の南端に位置する。やや北側に「鉄城」の旧観を再現する「江湖文化城」を置き，そこに至る道の両側にそれぞれ数軒ずつ，土産物を扱う売店を配置する。左右に「孫公祠」「呂祖廟」，左手奥に「小泰山」などの施設がある。また開設当初には，ゲートの近傍に万里の長城をイメージした巨大迷路「迷魂陣」，ゲートの西手にアイススケート場があったが，これらの施設は98年現在，すでに使用をとりやめている。巨大迷路跡には新しい動物雑技の劇場が増設されている。

「雑技大世界」の主要部分は，サーカスに不可欠な一輪車をかたどった平面計画がなされている。椅子に当たる部分に雑技のテーマパークである「江湖文化城」があり，そこから「明星大道」「時空大道」と称する通路が延びる。これが椅子と車輪を結ぶスポークにたとえられる。「大道」の西側に，「雑技芸術の生命力と，かつての賢者に対する崇拝」をイメージしたとされる「漢白玉」製の16本のトーテム・ポールがならぶ。

その先の広場，いわば車輪の軸にあたる位置に，銅製のオブジェ「雑技魂」が置かれている。彫刻家矛雲の手になるもので，牛の頭と３人の逆立ちした子供たちの姿から構成されている。牛には３つの目があり，三方から眺めても，両眼があると見えるように作られている。このモニュメントは，「雑技が庶民の労働生活から起こった芸能であること」「呉橋の雑技文化は労働生活の庶民性と大衆性を融合して生まれた芸能であること」を象徴していると説明がなされている。

現在のところ「雑技奇観宮」と「魔術迷幻宮」の二館が開設されているだけであるが，この「雑技魂」のシンボルを中心に取り囲むように，扇形の敷地を有する展示館が多数ならぶことが想定されている。その東側，国道に面して，テーマレストランおよびテーマホテルである「雑技賓館」が立地し，また敷地の西北側に飛行場，さらに西の奥まった位置に県立の雑技学校がある。



1. 魔術迷幻宮　2. 雑技奇観宮　3. 雑技博物館　4. 雑技賓館　5. 江湖文化城　6. 呂蒙賓館　7. 張公廟
8. 小泰山　9. 迷魂陣　10. 動物馴演園　11. 旅游飛機場

図２　雑技大世界配置図（開業時。将来構想も含む。）

4－2　江湖文化城の概要

中核施設である「江湖文化城」は，呉橋の雑技がもっとも栄えた頃の「鉄城」を模している。南北160m，東西120mの矩形平面，高さおおよそ7mの城壁が四周にあり，四方に二層の楼を持つ城門を開く。「江湖」とは「川と湖」，ひいては「世の中」全般のことを意味するが，ここでは世俗の生活世界を指す。「江湖文化」とは，とりわけ雑技芸人が活躍した盛り場や祭礼の場などに関わる文化全般を示している。

「江湖文化城」の環境設計は，外観は地元呉橋の「鉄城」を手本とするが，内部の環境造形には北京の「天橋」，天津の「三不管」，上海「大世界」など，かつて雑技・雑芸が盛んに行われた大都市の歓楽街，ないしは劇場の風采が重ね合わされている。芸人たちの故郷である呉橋と，活躍の場であった大都市の雰囲気を重ねて体感できる場を設けようという設計者の意図を読みとることができる。

城壁の屋上は歩道として開放され，入場者は四周をめぐることができる。四方の楼門のうち，特に南門の楼内だけは展示室になっており，かつての盛り場の文物が展示されている。城壁は，内側に開口部をもつ細長い二階建ての建築物と見ることもでき，上階に百室あまりの居室があり，南門から東門を経由して北門まで続く300mの長い廊下がある。当初は，青幇，紅幇，唐明皇，歌姫，ばくち館，喫煙館など，過去の「江湖」の様子を紹介する「江湖百相館」になっていたが，現在は公開されていない。いっぽう下階は典型的な商店の様式で建設されており，一部は従業員の住居，および彼らの子弟が学ぶ学校，事務室，売店等に利用されている。

「江湖文化城」には，仮設劇場，広場・中庭などの屋外も含めて，雑技や手品を上演する場所が十ケ所ほど設定されている。上演時間は厳密には設定されておらず，客の多少を鑑みて，舞台ごとに随時，演じられている。また団体客などに対してはガイドがついて，各舞台を移動しながら効率よく芸能を鑑賞できるように配慮がなされている。以下，主要な舞台と演目を紹介しておきたい。

南門前の広場では「馴白鼠」「独台劇」「拉洋片」など，かつての大道芸が復元され上演される。「馴白鼠」は，白いハツカネズミが風車を回したり整列したりするさまを見せる古典的な芸能で，時に「劉全進瓜」「白坏裕桃」「李三娘打水」「武松顧赦」といった物語を再現する。「独台劇」は唐の時代にさかのぼる伝統芸能で，一人の使い手が舞台の下に潜り，両手で人形を

図 3　江湖文化城（楼門）

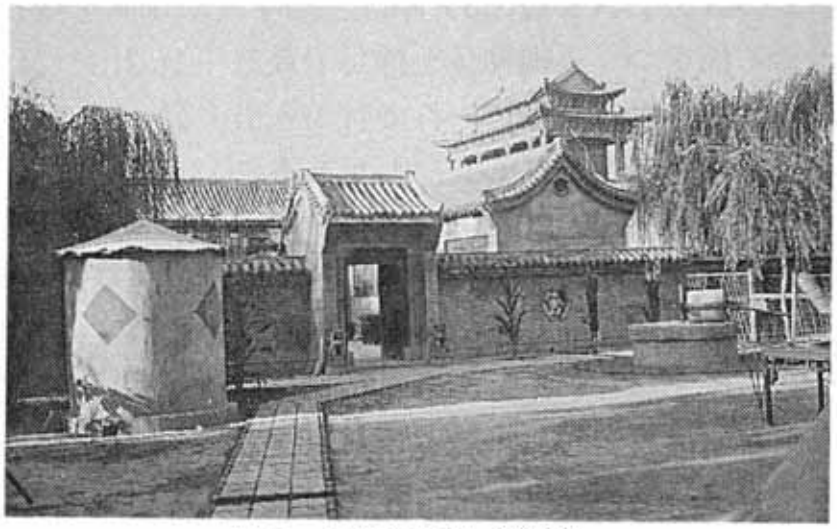


図 4　江湖文化城（城内）

図 5　江湖文化城（従業員居住区）

遣い，唄，台詞，伴奏すべてを独力で演じ，京劇，評劇，皿回しなどの雑技等，多くの演目のハイライトを見せる。「拉洋片」はいわゆる「覗きカラクリ」で「西洋景」という旧称がある。

「雑技大棚」は，かつて呉橋の雑技団が設けた仮設のテント小屋を再現する劇場である。呉橋では仮設小屋の伝統は500年近い歴史があると伝えられている。ここでは火を食べ吐く芸「吃火吐火」，一輪車上で足で頭上に椀を投げて重ねてゆく「車技」，鋼線のうえでバランスをとる「鋼絲足技」などが上演される。

「中心広場」では，大道で行なわれた気功を用いた技を復元，太鼓ほかの鳴り物を伴奏として再現する。銀製の球を飲み込んで吐き出す「吞鋼球」，長い剣を喉まで入れて出す「吃宝剣」，頭にレンガを置いて金槌で叩き割る「油錘頂」，太い針金で首を絞め5分間ほど無呼吸の状態を見せる「鋼節」，高さ23mの刃物で段をつくる縄梯子を裸足で登る「上刀山」などが主要な演目である。そのほか，楊枝を鼻にいれて目から出す芸，胸に針金を巻き付けて切る芸，脇腹で鉄の棒を曲げる芸などがある。

「戯台」では二胡や鎖吶，太鼓などの上演がある。400斤余りの大きなひきうすを腹部にのせ吹奏する「気孔鎖吶」という特技も見せる。少年による京劇の上演，両手で絵画を描く芸の実演もある。「雑技魔術茶座」では，手品師がみずから演技をしながら，タネあかしが行われる。「県冀」では，かつての呉橋の役人の扮装をしたた演者が，中国手品「滑稽魔術」を演じる。

「雑技小院」では，呉橋の典型的な雑技一家の家庭が再現されている。中庭で家長が長い鉄の道具を鮮やかに振り回して舞う「飛叉」を演じ，妻が傘の上でボールや急須や帽子を転がす「傘技」を見せる。また娘が，電球の上に台を乗せ，その上で体をそらして皿回しをなす「魔技叨花」を演じる。「家場院」は農家を再現した舞台で，シャベル・杓子・椀・箸・脱穀用の刺股・馬鍬・箒など日常的な生活道具を用いて曲技を上演する。

「馬場」は「馬術」「足大缸」を中心とする屋外劇場である。速く走る馬上で直立や倒立をなす「馬術」は唐朝に溯り，のちに清朝末期に発展したと説明されている。「足大缸」（あるいは「掬大虎」）は，呉橋における伝統的な演目で，両足で240斤の重さの大瓶を支持し回転させ，瓶の中に観覧者を一人座らせて持ちあげるところを見せる。そのほかに，鞭を操る技や，水の入った椀を手や口でまわす芸能，6m程の棒を肩や額で支持する芸も演じられている。

図 6　拉洋片

図 7　雑技大棚

図 8　中心広場

図9　戯台

図10　馬場

4－3 「魔術迷幻宮」「雑技奇観宮」の概要

「江湖文化城」の北側，広場に面して「魔術迷幻宮」「雑技奇観宮」の二館がある。両館をつなぐ弧状の壁面には，長さ56m，高さ6mの巨大な銅板が掲げられており，「雑技文化」を表徴する壁画が描かれている。団体で演じる自転車芸を中央に描き，両手を広げて来客を迎える呉橋の人たちのありさまを，風にゆらめくテープの図像に託している。また左右に太陽と月を描きわけ，呉橋の雑技が光り輝くさまを表現している。

「魔術迷幻宮」は建築面積4432㎡，建築費用は620万元にのぼる。23の場面を用意，30種以上におよぶ国内外の手品を上演する屋内型の複合劇場である。「天に昇って桃を盗る」「蜘蛛女」「唐明皇が月宮で遊ぶ」「武帝妻を想う」など，神話および民間伝承を題材とする舞台装置がある。

「雑技奇観宮」は建築面積は5529㎡，建築費は880万元におよぶ。18場面におよぶ機械仕掛けのジオラマがあり，黄帝の時代から今に至る中国雑技の歴史を総覧することができる。そのほか呉橋の雑伎団に関わる歴史展示，呉橋の芸人が世界各地のコンクールで受賞した事跡を紹介するコーナー，雑技体験ができる屋内劇場などを併設する。世界でも類例のない曲芸を専門とする博物館である。

ジオラマの題材を整理すると，第一に雑技の原型を示すと伝える故事の場面，第二に呉橋の芸人が実際に活躍した姿を再現する場面，第三に雑技を題材とする歴史的な人形カラクリの再現等を見せる場面がある。以下，主要な場面を順に，かつ簡潔に紹介しておきたい。

エントランスには「桑土楽園」と題する壁画があって，桑の木，働く人，楽器，雑技芸が描かれている。日々の生活と共に呉橋の雑技が発展してきたことを表している。

展示の前半は雑技の原型を紹介する場面である。「黄帝戦蚩尤」は黄帝と南方九黎部落の首領蚩尤との戦いを再現する。蚩尤は銅の頭と鉄の額をもった半人半獣で，耳は剣のような毛で覆われ，人を刺し殺す角をもつと伝える。この古代の戦いを模倣した芸能が，のちに毛皮をまとい戦う姿を再現する雑技「角抵」となった。「百獣率舞」は，古代の労働者たちが収穫の後に舞い躍り，家畜とともに豊作を祝った様子を見せる。動物を扱う雑技「百戯」のルーツを示すものである。

「鶏鳴狗盗」は「史記」で知られる物語を出典とする場面である。紀元前298年，斉の孟嘗君は、秦の昭王に捕らえられた時，「狐白の毛皮」を賄賂

図11　魔術迷幻宮（左）雑技奇観宮（右）

図12　雑技奇観宮内部（洛陽景明寺）

に用いて部下とともに逃走に成功した。夜半に函谷関に到着したが朝になるまで門は開かず秦国から脱出できない。そこで物まねを得手とする部下が，鶏の鳴き声を演じると，あたりの鶏も鳴きはじめた。守備兵は朝と勘違いし門を開けたため逃走に成功した。ものまね芸の始めと言われるこの逸話が再現されている。

魏晋時代を再現する場面では、呉橋の芸人が登場する。４月８日，洛陽景明寺での釈迦の聖誕祭に際して，釈迦像を担ぐ列にあって呉橋の雑技芸人たちが練り歩く姿，また門前で芸を披露するさまが再現されている。

次に歴史に遺るカラクリの再現が続く。「水盧百戯」は，南北朝時代の技師馬均が発明したカラクリである。湖上に楼閣を設け，水車動力で雑技を演じる多数の人形を動かす仕掛けであった。同様に「水飾戯」は，船上で雑技を演じる木製の人形を動かすカラクリである。ここでは煬帝が鑑賞している場面がジオラマ景になっている。

次は玄宗が「馬戯」を見る場面である。唐代は雑技芸も外国との交流を通じて技巧が高まり，難度も高くなり，演目も多岐にわたり斬新さを増した時期といわれている。皇帝が宴を設ける時は，しばしば「百戯」を催させた。なかでも刺繍された玉を飾る百頭もの馬が，音楽に合わせ歩調をそろえる「舞馬」は壮観であったと伝える。ここではその様子が再現されている。

「勾欄瓦舎」の場面は，宋代の町におけるにぎわいを再現する。後に妓楼を意味するようになる「勾欄」とは，仮設の劇場のことである。「瓦舎」は仮設的な盛り場のことである。宋代には大規模な雑技の公演は少なくなり，雑技芸人の大部分は活動の場を大道に求めた。ただし「瓦舎」で興行できるのは，技量が高いか，意表を突く技を持つ者に限られており，そのほかのの芸人たちは，村はずれや道端などで上演するしかなかった。ここでは，そのさまを対照的に再現している。

「南園廟会」の場面は，明・清の時代における雑技の上演形態を示すジオラマである。明代に今日に至る雑技芸の主な演目が成立，清代には宮廷雑技が廃れ，雑技芸人は流浪した。ここでは８月15日から９月15日まで南園という場所で行われた縁日を再現する。高く舞台が設けられ，専業の芸人のほかにアマチュアの愛好者も芸を演じたことが示されている。

４－４　諸施設の概要

そのほかの諸施設についても概要を記しておきたい。

「呂祖廟」は「八仙過海」の物語に登場し，雑技の始祖と伝える呂洞賓を祭祀する堂である。3500㎡の敷地に正殿と東西の側殿を設ける。正殿には呂洞賓像，雑技の歴史を描く壁画，八仙の伝奇物語を紹介する八仙物語館がある。

「孫公祠」には，呉橋に縁のある戦国時代の兵法家孫月賓を祀る。1028㎡の敷地に正殿と東西の側殿を置き，正殿には孫と四大門徒の像と二十八宿像を置く。孫はその有能ぶりを妬まれ，両足を折られたうえに軟禁される極刑を受けたが斉に逃れた。のちに天から授かった一日に千里を走る神牛に乗って，今の呉橋一帯で戦い，八卦を使って罠を仕掛け見事に勝利を収めたと伝える。この故事にちなみ，「孫公祠」には，伝説の神牛の住まいである「石牛亭」と「八卦の陣」が設けられている。

「動物馴演園」は2443㎡の敷地がある。虎，ライオン，熊などの猛獣を含め多数の動物を飼育し，動物芸を上演するステージがある。

「小泰山」は「泰山行宮」ともいい，3300㎡の敷地がある。かつて西王母が呉橋で休んだという伝承を受けて，歴代皇帝が封禅の儀礼を行った東岳「泰山」の景観が再現されている。近傍に池を掘った際の残土を高さ7.5mに積み，奇岩を配置，植樹をなした。この丘のうえに泰山の「碧霞祠」をそのままに再現，正殿，東西側殿，南門を設ける。堂宇はすべて木造で，棟高7m，彫刻を施した青いレンガと瑠璃の瓦で葺く。正殿には，碧霞元君，眼光娘娘，送子観音，四大天王など20体以上の神像を安置する。将来的には「碧霞祠」の後方に「玉皇閣」を建てる予定がある。

「雑技賓館」は4400㎡の敷地を有する。「雑技文化」を主題に，宿泊施設とレストランを併せた施設である。ホテルでは，子犬が客のスリッパをくわえる，オランウータンが帽子を脱がせる，オウムが挨拶する，朝目が覚めると部屋の装飾が違っているなど，さまざまな趣向を用意する。レストランでは食事中に中央の舞台で雑技を上演するほか，空中を飛ぶる鶏を落とす，絵画の中から魚を釣りだして調理人に渡すと瞬時に料理となる，ウエイトレスがひとつの酒壺の中から二種の色の違う酒を注ぐといった趣向がある。

「旅游飛行場」は「雑技大世界」の西北の一画を占め，46000㎡の広さがある。24人乗りの二機の飛行機を保有，待合室の設備があって，遊覧飛行が可能であると説明がなされている。

敷地の西端に位置する「呉橋雑技学校」は全寮制の県立学校である。中国で唯一，雑技を専門とする職業中等専業学校で，毎年，ひろく全国から公募

図13　小泰山

図14　雑技賓館（レストラン棟）

図15　雑技賓館（ホテル棟）

し，各学年二十人程度の学生に対して英才教育を行っている。中国各地の雑技団から講師を招き指導を依頼すると同時に，有望な卒業生を各雑技団に送りこむことを目的としている。

5　結びにかえて

5－1　「雑技大世界」の現状と課題

1998年「雑技大世界」の従業員は240人，うち60％は芸人で，短期一年，中期三年，長期五年など，期間を定めた雇用形態を採択している。また芸人たちの子供は，「雑技大世界」内の学校に通い，また園内の舞台にもたつ。ただ彼らは芸人の数には入らず，学生として扱われる。

開園後の経緯はどうか。年間30～40万人ほどの入場者があり，うち30％が家族連れである。春（５月１日前後），秋（10月１日前後）などが来園者が多く，夏がオフシーズンとなる。これまで，もっとも多くの入園者があった時には１日で５万人の来場があった。園内諸施設では「江湖文化城」「小泰山」の人気が高い。物販などを含めると，売り上げは年間2000万元以上である。98年における「雑技大世界」の入場料は35元，「江湖文化城」と「滑稽動物園」に限ると28元，「江湖文化城」だけでは25元である。

「雑技大世界」は，中国国家河北旅游局によって「国際観光地」の指定を受け，かつ96から98年まで，３年連続で旅遊局の定める「国際観光コース」に選ばれた。この地を視察したある国際機関の関係者は「東洋のディスニーランド」と賞賛したという。

経営者へのヒアリングでは，今後の課題として，まず大都市とのアクセスの改善が指摘されていた。97年度の状況では，最寄りの大都市である天津や済南から自動車で片道４時間以上が必要であった。98年には新たに高速道路が一部供用をはじめ，済南から３時間ほどの行程であった。呉橋を通る高速道路が全通すると，北京や青島からの足も良くなり，観光の圏内となることが予測されている。

またＰＲも不十分という認識がある。「故郷の風雅な芸を顕し，民族の精粋をひろめよう」の意である「展示門族精萃尽顕芸卿風流」というスローガンを掲げ，またパンフレットの英文解説には「Acrobatic Cultural Travel」の文言があり，あきらかに「文化観光」を強調し，広域でのセールスに向けて努力をなしているが効果は十分ではない。従来，国内向けにテレビや30社ほどの新聞媒体を使った広告をうってきたが，今後は東南アジア諸国のエー

ジェントを対象に重点的なセールスをすすめる方針という。

この間，国内外に当該施設を宣伝するため，新しいイベントも創案されている。1998年５月１日から10日にかけて，国家観光局をはじめ他の自治体関係者，エージェントや香港の合資会社関係者を招待し，「中国呉橋雑技文化祭」を開催した。「雑技大世界」で呉橋の伝統芸を披露したのち，県立の雑技学校を視察，花火大会，レストランでの雑技披露等があった。通常よりも内容豊かな演目をそろえ，旅行社との新たな契約も成立している。詳細は不明だが同イベントは1999年に第二回を実施している。

高速道路の開通を視野に入れて，さらなる施設の拡充も予定されている。「雑技大世界」では，第二期工事分として，観客参加型の「雑技遊園地（仮称）」，「国際小児育成センター（仮称）」を99年以降に開業する予定で準備をすすめている。また動物園も南側へ４～５畝ほど拡張し，「中国北方動物調教センター」を増築する計画がある。

5－2　文化の再生産と保存　テーマパークの果たす役割

以上，概観してきたように，呉橋の「雑技大世界」は地域固有の歴史と文化を題材に，アメリカ流のテーマパーク的な手法を混じえつつ，他に例のない観光施設をかたちづくった事例として評価できる。ただ経済波及効果等の詳しい調査はなされていないが，県政府関係者をはじめ経営者側には満足している様子はなかった。

その演出方法，環境設計技術等は同種の産業の先進地であるアメリカ，あるいは日本などと比べると決して高いものではないが，管見では中国における水準にあるといえる。将来的に交通の便が改善された時に備えて，施設の拡充をはかる段階にあるという認識が確認された。

「雑技大世界」の事業は，単に経済的な側面からだけではなく，むしろ文化面での効用が高く評価されるべきだろう。ここでは，かつて盛り場の大道で演じられた，大衆的ではあるが洗練されていない芸能を，歴史的に記録し，保存し，また実際の演目として採用している。時に雑技が近代化する過程で失われた演目を，模型や実演のかたちで再生する試みもある。いっぽうで敷地内の「雑技学校」のように，これまでにない演目，とりわけ中国の「雑技文化」の伝統にない新しい技の開発研究をする場もある。双方ともに，北京や上海など，大都市の雑技団が開発してきた近代的な「雑技芸術」とは異質な「文化生産」の仕組みである。その成果がいかに地域に還元されているの

かは，稿を改めて論述したい。

ただ少なくとも観光客の「まなざし」を地域住民も意識することで，またそれが経済的な効用をもたらすという期待のもと，既存の伝統をもとに地域文化の再編成がなされていることはあきらかである。「雑技大世界」の例から，中国にあっても，テーマパークというアメリカン・エンターテインメント・ビジネスが，地域が誇りとする失われた地域文化を蘇生させ，さらに保存し，同時に新しい地域文化の創造をうながすインキュベーターの役割を果たしつつあることが了解される。

文　献

周宝忠他編『呉橋雑技的伝説』中国民間文芸出版社，1989
李敬義『天下雑技第一郷』河北科学技術出版社，1993
『鉄城与江湖文化城　名城・名人・故事・雑技風采』1995
呉橋県政協文史資料委員会『呉橋圏文史資料』1997
曽士才「民族観光による村おこし　中国貴州ミャオ族地区の事例研究」『旅の文化研究所研究報告６号』旅の文化研究所　1998
Oakes. T"Tourism and Modernity in China"Routledge Studies on China in Transition,Routledge,1998
高媛「『被害者』としてのホスト　戦後の『満州』観光における中国」『観光に関する学術研究論文入選論文集　第四回　観光振興又は観光開発に対する提言』財団法人アジア太平洋観光交流センター，1999

付　記

本稿は98年～99年度，旅の文化研究所・公募研究プロジェクトの成果の一部である。関係各位に謝意を表したい。